

06・わたしの気持ち

トラック05の十数分後。

とある年の春。

五月十三日。朝七時半ごろ。

場所は主人公とシーラが本日宿泊する、高級ホテルの浴室。
天気は晴れ。室温は二十四度程度。

主人公、まだ裸のままシーラに膝枕をされ、ベッドに寝そべっている。
だが、そろそろ朝食が運ばれてくる時刻だろう。
もう起きて、着替えなくてはならない。

舞台はとても広いホテルの一室。

SE1 外で鳥が鳴く声

【最初から途中まで流す】

【建物の中から、小さく聞こえる】

【0―5秒ほど流してフェードアウトする】

SE 2 主人公が身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「そろそろ……起きなきやかな……」

※ここから『主人公が起き上がる』まで、シーラは主人公に膝枕した状態で話している。

●正面 【※50センチほど上※】 30センチ

「穏やかに、だが、少し名残惜しそうに。」

シーラもまだこのまま、主人公と過ごしたいので」

ええ……そろそろホテルの方が、朝食をお持ちになられます。

私（わたくし）達も、支度を始めましょうか」

〈主人公〉

「早いわねえ……」

主人公、仰向けになってシーラの膝に甘えながら、

……もう時間かあ。

なんだかちよっと、現実に戻される気分だ。

一生シーラと二人きりで、ひたすらにいちやいちゃできればそれが一番幸せな気がするのに、現実はそうはいかない。

シーラと幸せになるためには、シーラと一緒にいる以外の事を、たくさん頑張らなくちやいけないんだ。

わかつちやいるけど、それが当然なんだけど。時々それが淋しいなあ……。

と思う。

主人公は仕事も学校も好きだし、生活の中のたくさんの事にやりがいを感じている。

だが、やはりシーラ存在は別格なのだ。

できればずっと、シーラと二人きりで居たい。ずっと、シーラとの行為に溺れていた。そう思ってしまう事があるのだ。

● 正面 【※50センチほど上※】 30センチ

「穏やかに、だが、少し名残惜しそうに。

シーラもまだこのまま、主人公と過ごしたいので」

ええ。楽しい時間はあつという間でございます。

【少し間をあけてから。

帰宅後の予定について確認する】

ご帰宅されてからは、予定通り篠田様とのプロジェクトの準備をされますか？」

〈主人公〉

「うん、そのつもり。

あんま時間ないけど、出来る限りの事はしたいしね」

だから主人公は、シーラもまた、同じ気持ちでいてくれたら嬉しいと思う。

……しかし、もしそうだとしても、そうでないとしても。

今の自分たちの関係は、少々密着しすぎてはいないだろうか。

と、考える事もある。

確かに主人公の仕事もあり、以前よりは別行動する時間が増えた。

それでもシーラは、いつでも主人公が望めば必ずそばに居てくれるし、ボディガードという職業柄、主人公の隣にいる事を最優先としている。

だが、いつも必ずそうする必要があるだろうか、という気もする。

たとえば、他にもボディガードに準する者がいる場にも、無理にシーラを同行させる必要はあるだろうか？

たとえば、シーラが彼女の意味で積極的に何か学んだり、経験を積んだりしたいと思っているのに。

主人公が『単にそばに居てほしいから』という理由で、彼女の行動を制限してもいいのだろうか？

そんな恋人関係は……ちゃんと持続して……いけるのだろうか……？

と、思う事もあるのだ。

●正面 【※50センチほど上※】 30センチ

「穏やかに優しく。」

名残惜しい気持ちから『メイドモード』に切り替えようとしている。

『篠田様は、今回初めてお会いする方ですし、私も居た方が良いでしょう』と言おうとして途切れる」

承知しました。

打ち合わせ当日は、私（わたくし）も同席致しますね。

篠田様は、今回初めてお会いする方ですし……」

〈主人公〉

「あ、その件なんだけどね！ シーラは同席しなくてもいいよ」

だから主人公は、いつもと違う提案を試してみる事にした。

もちろんこんな淋しいに決まっているが、あえて言ってみただ。

SE3 主人公がベッドから起き上がる音

【最初から最後まで流す】

※ここで、主人公が起き上がる。

●正面 30センチ

「【虚を突かれて。

予想だにしない答えだったので】

……え？」

〈主人公〉

「今回は篠田さんにうちまで来てもらう訳だし。

ボディーガードの仕事は、特にないと思うんだよね。

だから、考えたんだけどさ。

シーラは自由にしていいよ。

たとえば、さっき言ってた、志保達の勉強会に一緒に行くとか。

もちろん、シーラも興味あればの話だけど……」

もちろん主人公はこれを、己の自立のつもりで、シーラを思ってたのつもりで。

そして、今後の自分達の間係を考慮してのつもりで発言した。

だがそれゆえに、主人公は気づかない。

シーラが今、珍しい位動揺していて、主人公の言葉を、とても淋しく感じている事を。

● 正面 30センチ

「『ほんの少し残念そうに。』

驚いていて、うまく感情を隠しきれないという感じで。

だが、それでも概ね感情を抑えられているため、主人公は気づかない」

然様（さよう）でございますか……」

〈主人公〉

「どうかな？」

● 正面 30センチ

「穏やかに優しく。」

もう気持ちを切り替えて『メイドモード』になっている。

シーラはこれが、主人公なりの配慮であり、今後の事を考えてのものだと理解している
ので。

また、決して自分の事を不要だから言ったわけではないとわかっている。

だが、それでも内心は少し淋しい。

大人びた女性として振る舞っていても、シーラはまだ十代で、恋人である主人公に深い
愛情と執着を寄せているので」

そうですね。仰る通りです。

……では、お言葉に甘えて。

今回は同席せず。

私（わたくし）も、志保達と勉強会に行こうかと思っています。
折角ですから、私（わたくし）も見聞を広めて参りますね」

〈主人公〉

「ほんと!？」

主人公が思わず身を乗り出すと、シーラが微笑んだ。

その笑顔はいつものシーラそのもので、主人公はその奥にある思いを、すっかり見落としてしまう。

●正面 30センチ

「【穏やかに優しく。

もう気持ちを切り替えて『メイドモード』になっている】

ええ。私（わたくし）も。

少しでもお嬢様にふさわしい存在になりとうございますから」

〈主人公〉

「むふふ。さっすがあ。やっぱシーラは頼れるう」

●正面 30センチ

「穏やかに優しく。」

もう気持ちを切り替えて『メイドモード』になっている」
ふふ。ありがとうございます。

そう仰っていただけで、嬉しい限りでございます」

〈主人公〉

「んー♡」

● 正面 0センチ

「【※2回※ キスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス】

ん……ちゅっ♡」

主人公、シーラが前向きな事が嬉しくて、思わず身を寄せてキスをする。

シーラはもちろんこれを受け入れてくれ……二人の関係は、今日も何の問題もないように見えた。

シーラ、主人公の左耳に唇を寄せ、ささやく。

これによって声の方向が『正面』から『左』になる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく」

では……お嬢様。お着替えを致しましょうか。 ※

【※1回※ 耳にキスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス】

ちゅ♡
「」

ここでフェードアウトして終了。